

暑いからだもてあましてゐる女西瓜の種

内島北期

ある物でめしを食つて夕べきりぎりす
夜の森がせまつてくる水おと

けやきの大きく黒く夜の二人で居る

客に又客が来て俊二君萩咲く(厨雲社)

大工さん墨をうつ二百十日の壺けの曇り日

葉かげにも月の明るいかぼちやをもぐ

蚊やりの匂ひも時代めく水の中の豆腐

い、なづまする溝端のほうききぐさ

とうがらしの辛いのが好い年になつてゐるのを佛の日

日まわりを睨かせ肌着を洗ひひとりでさばした暮し

こどもはただかて草刈り水浴び毎日一回づつかみなり

此の家つめたたい井戸のある木に咲いた花がこぼれてゐる

砂利をふるつてからだ日にやけた日のがげつた川が流れてゐる

ほこりしめしほど降つて場末の電車木槿咲いてゐる

あつまれば食のはなしめい煙管出して蚊の鳴く

涼しくうちわの繪を見るこれが妻になるおんな

田舎芝居の廻り太鼓かみようが花つけてゐる

まことひとりはいよいもの花はうつくしとおもう

トマトのそば茄子がなつてうちわもつて暑いこといふ

ほとけへ茗荷の子などしづかな迎え盆の夕べとなり

京はかぶらの味噌汁なども泊めて貰うてしみみあき(層雲社にて)

一と雨すぎでまだ残つてゐる日が胡麻はたけごまのはな

茗荷汁など古里は夏は青柿おちてゐる

大根の二葉にうすい日さしのまだむしのなく

木戸夢郎

吉澤稻市

葉山鳴雨

池田詩外樓

うたい、マツタケは焼けたかね」と空のお月さんが
聲をかけたのである。

×

月のした暗くて松たけを焼く火のいるとなる

ちうばこの中の月夜のみようがを箸

草の穂とろうそくと月が雲を出る

草上回座さかづきごとの月となる

「さかづきごとの月」といふのは、信州の名所「田
ごとの月」に思ひよせたので、昔、更科山のふもと
では、刈田の水のその田の「枚ごとの、空の月影が
やどるので、これを「田毎の月」と稱した。それ
は、科學的に考へると、不可能のことなのだが、空
想してみるといかに美しくしい。だが、めいぐが手
にもつてゐるさかづきのその一つづつに月をやどし
て見る「盃毎の月」は實際に出来るのである。

○

名古屋の句會のことは、はじめにも一寸書いた
が、近ごろ、平野の會が毎月、例會をもつことにな
つて、八月は松阪屋の樓上で復活第一回を開いて、
五十餘名が集つたといふ。私が出たのは、第二回目
だつた。こんど名古屋の支社へ轉任して来た冬人の
社の一室をかりることにしたといふ。此の日は、大
江村から青史、内海から健三が来てゐた。地元で
は、蓮子、秀明、武朗、梅宇人、爲久など昔なつか
しき顔が並んでゐた。豊橋から源三郎も来てゐた。

木村 緑平

木が夜に立つてゐるに雪つむ
水にふる雪をきく

となりからうちに来たうぐいす
咲いてただ咲いてゐるだけである草
月の明るさよ山もうつり水馬です

飯尾 青城子

痛んでゐるとひさしの蜂の巢であり秋の蜂であり
道が丘になる蓮田の雨になるまで枯れてをる
このごろうちに居る日の多く椿のしべ花のまん中
たたみへ湯呑を、一輪こちらむいとるしべ
やまのかげがのびてくるくさにおいてくさかご

藤澤 せいじ

短日の汽車が山のふもとを通りすぎてゐる
山もみぢもくれやすくしてくれてゐる鐵砲風呂
かりすまいのしちりんなら秋くものしたへだしてゐる
日なたは日かげは日かげの虫のないてゐるこえ
日蔭の咲いて日おもてへ赤くゆれてゐる夏のおわり

小谷 信夫

女のおりてゆく石段からの塔、松の木、秋雲
真い縁らしい談へ桃と小さなナイフ
ヒマラヤ杉の下枝までの月になる門のうち
雨が通つたあとの陽が退どきの通りとなる
たんぽから吹きぬけて通る風を涼しく佛檀のおいばい

東松 八洲雄

月夜の霧は浴衣に羽織きて踊りにゆく
山に雲が涼しくホップの畑電車が勾配になる
月のあかるさは松の葉松のしん遠い祭の笛

若いグロツツの眼とし、濱から見望、草中、
他少女ふたりが見えてゐた。

一體、名古屋の厨雲の句會は、大正の末年からは
じまつたものだ。最初は此地の鈴木商店内に同人が
出来た。源三郎、漁人、木靈といふ連中で、なか
なか熱心だつた。人数はさして多くはならなかつた
が、みな好い素質の作家だつた。鈴木商店が昭和初
年のパニックで没落して、同人がチリチリになつ
て、この句會は「たん、終を告げた。源三郎は下
の關に行き、木靈は播磨造船所におちついた。源三
郎は下の關で關門の會をそだてた。木靈は、今は短
歌の方へ轉向してゐるが、堀英之助を層雲に入れた
のはかれである。「一つぶのムギ死なすば」といふこ
とばがある。一つの會が消滅した時、その種が四散
して、その散つたところに、新しい芽が出るのであ
る。名古屋の會の第二期は、昭和の五六年以後、大
平洋戦争の初めごろまで、秋彦、蓮子、青夫、承次
武朗、秀明などいふ面々が活やくした城の會の時代
だ。いま鎌倉にゐる青夫が名古屋市の助役をしてゐ
たので、市役所の中だけでも、一つの句會がもてる
位だつた。名古屋に近い津島では、魚眠洞の他に信
全、錦城など云ふ連中があつて、後陣の氣勢をあげ
てゐた。「城」といふ機關誌も發行されて、これはか
なり體裁の好い冊子だつた。戦争中、徳川園で、層
雲中京大會を開いた時には、百人近くの人が集つ

音橋の人通りひざかりになる

池原魚眠洞

水に杭の夕立にげてる

風鈴にきた風が二階の風鈴にもいつてる音で

ほし草うちがえしにきてその音いつてしまふとそれなり日々

簾にすけて人の起ち居風が出ると日のおとろえはじめ

窓いつばいの青い葉と一つの風鈴ともかくもをる

うちにをればはだかでいちにちをる

半弓屋の灯のそれを見るでもなくすすんでをるのもすすしい

聖歌、風はどこからともなくあつてパイプオルガンの前奏

色どりのあるわら帽子と貝がらとある

道が月の明るいとこへ出る

山にうすい雲がかかり月だけは冴えてゐる

一本の樹に朝の日がさしかけてゐるところの畑

つゆけくてしはらくは流にそうてゐる道

おいなりさんのとりあさの月あわのほがたれてゐる

雨ふつて雨はれてかなかな

風が吹いて落したものを吹いてゐる

日のあるうち日がさしてゐる木の茂り

一色だけけで草は咲てゐる

木のせみがないてのんだ茶碗が伏せてゐる

木に雨がふり梅の木も雨になつてゐる

祭の日でも静かなかげつた街を電車がゆく

虫なく背中見せて湯につかつてゐる娘としごる

古里はからたちのとげのするどい雪になりそうな(兄死す四句)

棺の釘をうつ石手ごるな石を手にし

井手逸朗

芹田風車

堀英之助

た。毎月の會は蓮子の家がひろくて、又、こま／＼と世話をしてくれたので、集るのに便利でもあつた。私もたび／＼蓮亭に来て泊めてもらつた。その後、逸郎が名古屋の近くの田原に赴任して來たので、城の會のために頼もしく思つてゐたが、戦争がはげしくなり、名物の城そのものも壊かれた有様なので、城の會もしぜんと影がうすくなつてゐたのである。

平野の會は、名古屋として第三期にあたるものだ。此の會は、大江村(岐阜縣)の青史が津島の魚眠洞と共に創立したもので、「平野」といふリイフレットを發行したのが、始めたが、愛知、岐阜を總稱しての、いわゆる濃尾平野の肥沃なる土の上に、層雲の道を耕さうといふのが目的なので、尾張につゞく、三河、遠江の地も亦、一つの平野の延長であるからと、ちかごろは豊橋濱松方面までも誘ひかけて、それを名古屋を中心として、まとめてゆくといふ構想らしいのである。青史は政治的の手腕があるし、魚眠洞は指導者としての經驗があるから、これは順調に發展してゆく可能性があるとおもはれる。名古屋は空襲で焼原となり、舊城の會の同人も四散したとは云へ、此の日も昔の無事な顔がたいぶんに見えてゐたことだから、共に力を協せて、名古屋の層雲道復興のために努めてほしいと思ふ。

わたしも血に つながる土の 一魂を山鳩のなく
照り返すほどは 故里の豆腐のうまいことなど身内どうし
空が 燃あとのう えにある 雑草夕やけ
朝早い 南瓜の花としより夫婦でゐる
とうがらしあからんで つつましいことをいふ
よるがはだえにすすしいこといなづまいなづま
猫、いなづまがすすしいたたみのうえ
風があきらかに月のおもてを吹いて通る
あめしづくするに風ふくほどの梅のつぼみ
花に灯のついて夕方薬局小窓の中のあかり
立山やまやま夕やけしさまの春水にうつり
もうつばぬが 大あらしのあとあめふり
ながいくちづけのあととはほたるがとうる
傘かりてきて晴れて 崖に藤かかり (北鎌倉後二居)
もくげのしるさは月のあかるさ
草山日のてる 片面このとき山鳩のとぶ
一と夜二た夜をうつて劇の一座が青田でてゆく
すこししめりて朝署長官舎のなす島の花
むかしむかしのはやしのかなかのいけのみづいろ
おやち五十がらみしやものひなしやもになつてあるく
草にあけくれてへやかしてもらうてみて秋
七日月ごろわたしの家と二三軒西向き
もくげ口笛ふいて呼ぶ青年でてゆく
こんどは犬の私にほえてくるいなか

秋山秋紅蓼

高橋良太郎

大越吾亦紅

青春

橋本健三

青春は
或日のピクニックでもあつた

それは

花が美しいから
きみしいやうに

春は結局つまらなかつたやうに
春は憂鬱でもあつたやうに

ありあまる饒餘と悔恨と不満足とを以て
勿論さうであるが

一九四〇年代の青年も
創世紀のやうに泣き笑ひ憤慨し
單純すぎるほど複雑であり
勿論さうではあるが

それは
たしかに
さうでないものでもあつた

風　　り　　ん、　　病　　院　　と　　て

吉田六郎

よるの鳴かない美しい虫であつてありくうしほのよな月光が寝台のカーテンの暗緑埋葬の丘にあつまるきのこのようにぬれた傘で啞の子に啞の子が手まねしてゐる夕焼がまつかな銀のナイフがすらすらとのびてゆく愛情を梨の皮をむいてゐるくりやことといわするころの買つたなすにいただいてきたなすくれきらないで月のかげもつてきたきびの穂道、膏藥の夕焼けてくる空が陶磁器試験所あたりくちべにくちびるをあかくするとわかる雨が降りどうしくらくてしづくする木かささしてあひにゆくくちづけ、しろいはなはしろくくれてくるぼくとぼくのかげとひとりきりである夏のまさかりである波、てがみで約束したその手の中にしてゐるいまレンズのぞいて女へ小さな不二をいれるとする月がいろをもつてからだまげてはいるくぐり戸こころをうちあげ夕べとなりし海うしろにしゆく湯の町日ざかり蝶の影していく湯宿の二階からザクらの花郵便局の中が見える湯の水のあかるさが、星から露がふるどこに居ても親一人子一人の、病室の月のさす(長女入院五句)病院からちよいと買物に、トマトがでてきたながい日のえんとつ、のすそからかげつてくる病院のまどまどともりころもがえの季節熱もどうやらあけがたの雲がうごいてゐる

岡野宵火

松尾　あつゆき

一枚月旦

筒井莖吉

E 岡野、宵火

夢みるやうな眸が作品にちらちら覗くのは、作者が戀をしてゐるのではないか？　息切れもせずこんなに「女」を立體的に描寫しつくした作家も少い。鳴雨や、かく云ふ筆者なども「女」を好んで描いたが、それは平板な點景的なものにすぎないで、宵火のやうに女の心臓の鼓動まで探索したことはない。

落葉てをにぎられてやさしい

宵火の「女」におけるやうに一つのテーマを追求する試みは、かつて綠平の「雀」があつたが、前者の製作衝動に精神生活の深い翳を見のがせない。後者のモーチヂは一片の俳諧趣味である。——肉親の「死」に當面して印象再生に成功したものに、宵火後二、敦之があり。失敗したものに筆者がある。

骨壺のおもみいだき膝におきさうして、をるはんらんする感情をろ過して、正嶋な印象把握をあやまらなかつたところである。特に「さうして、をる」の停讀は、優れた表現技術を語るもので、「をる」と意識して投やりに置いた所は、雑多な感情の嵐が去つて、ほつとしたしばしの感情の空白、一種の放心状態を心にくいまでに再現してゐる。コンキ

その一ところ花ささげ花ささげ歸つてゆく夕日

加藤 秋

朝でつゆぐさよう咲いてゐる公園で乞食でゆく
ちよんと猫畑にゐるトマト涼しくてまだなり
空で釘の音させてゐる秋になつてもねてゐる
旅は山に浮く白いくもですうるしかきのたるです
くさがしげるいとからくんでくる

どうやらいえて行水するきちまちとんでゐる
俣で近づいてお鳥居、の前をすぎてゆく、秋
はなしは、それから強い酒つがれてゐるこぼれる

田中 井夢

刈田いちにち雨のふる鱧泉宿のよごれた障子
月がもうさむくてポスト入れるとかかへる影で
祭がすむとしづかな雨が刈田、刈田のおもて
冬木の星が出そろうてゐる校門

櫻冬木の警察の門であり私のゆく白い病院であり
葉のないう空から葉のふる、夏
海が青い雨のあとの霞の芽がもう

夏が家のそばの日のかかげ
道を家へ日あ
力をもつて蟻がひく

近木 黎々火

水の平らな空をゆく鳥
竹やぶの竹がぬれてゐるて京が雨
壺のめしくふ列車が山にはいる

雨のあとの日がしばらくは木のそば
雨の道歸つてきて家にあめ
海へにごりおちてゆく水

嫌ひな北則も、かうした妙味は詠めねばなるまい。

F 近木 黎々火

「石」と「月」の俳人黎々火は黙々とその高爽な詩
境を耕してゆく。ちかごろの彼の句は月に洗はれる
石のごとく冷冽である。

石の月夜くもつてくる

こしかけて石が月夜

月がくもつてふと照つてきて、石

彼の詩魂に投影する対象を、あの白せきの頼に情
熱を蒼白く光らせながら、みじろぎもせず黎々火は
凝視する。あくまでその対象の心核にとびこまねば
止まないのだ。句材の新鮮を求めて瘦せる思ひの筆
者などには、その意味でも尊敬すべき作家である。

「風」の風車に近づかんとするのは「月」の黎々火
であり、風車と肩を並べて無技巧の技巧に徹せんと
するのは黎々火である。さき頃黎々火は「しようべ
ん」をテーマにとりあげた。かつて誰が「しようべ
ん」に雅韻をもたせたことがあるだらう。彼の明哲
とあの熱情にのみ興へられた収かぐである。これは
彼が単なる印象派作家でないゆえんである。花鳥誤
詠的低徊からぬきんでた黎々火をみる。其中庵のあ
るじとじつこんであつた黎々火は、その雲水の虚脱
に影響をうけた。「水」の山頭火にくんとうされた黎
々火は「石」の黎々火となりつつある。

秋の雨

井 泉 水

秋の雨がしとくと降つてゐた朝。市ヶ谷で下りると、強い降りになつてゐた。もとの陸軍省の構内。その一つの建物が極東軍事裁判所の法廷に建てられてゐる。私は此の日の傍聴券を手に入れることが出来たので、構内のコンクリートの坂道に、たきつけるやうな雨が川になつて流れる、そこを上つて行つたのである。

傍聴席からは谷底のやうに見渡される法廷はかなり廣い。上手には、米、英、ソ、華等十一ヶ國の國旗が一所に集めて立ててある。そこが裁判官席。下手に四列に長くつづいたデスクと、各人別の椅子がずらりとある。その前二列が辯護人席。後二列が被告席。此の左右兩席を向ひ合せたまん中に、檢察官席、證人臺、發言臺等がある。九時半、先づ今日の證人、荒木貞夫大將がはいつてきた。寫眞でよく見た通り、鼠のやうにとがつたアゴに長いヒゲ。タンセンと證人席につく。次は下手の扉が開かれて、被告、東條、小磯、廣田、南、大島、松井、平沼、白鳥、重光等々のめんく二十餘名が入廷して、それんの席につく。ついで上手の、花道とも云ふやうな廊下から、ウエツプ裁判長をはじめとして、クレーマア、パトリック等十一ヶ國の裁判官が入廷する。廷内の電燈が一せいに光度を増して、丁度、舞臺の幕があがつた、といふ感じである。管理は昭和七年、滿洲事變當時の事、コミンスカア檢察官が當時の陸相だつた荒木大將の供述書類に對する反對尋問からはじまつた。

「荒木證人、あなたは滿洲事變後の滿洲の状態には不満足だつたと云ふが、それはどういふ點ですか」

「それは王道樂土といふ理想にむかつて、我々が期待してゐたところがさつぱり實現されさうもなかつたからです」

かういふ問答は抽象的で、ヒョウタンを以てナマズをとつちめようとするもの、なか／＼結末に至らない。マクナマス辯護人が時々ハンジョウではないが、抗議を入れる、とウエツプ裁判長が簡單に可否を判じた後に、カア檢察官の尋問ははてしもなくつづくのだ。

「あなたは滿洲事變の後に男爵になつたでありませう、それは、あなたが滿洲事變に於て功勞があつたといふ理由ではありませんか」

「それは違ふと思ひます。私はさう思つてをりません」

「では、あなたはかういふ事を御存知のりませんか、當時の陸軍大臣、川島が首相岡田に進言していふのに、もしあなたを滿洲事變の功勞者として授爵しないならば、青年將校が承知しないであらうと……」

「そんなことは存じません。授爵の責任者は宮内省と存知してをります、今、お話しすることは私の所管ではありませんから、私は存知してをりません」

かういつた風に、質疑應答は、かなり微細に及ぶが、これに直接の關係のない廿餘名の被害はたいくつそうだ。東條はデスクの上で何かたえず鉛筆をはしらせてゐる。(ラク書でもしてゐるのか)平沼は天井と裁判官席の間を見あげて、まだ雨はふつてゐるのかなアといふ表情。以下の人々大同小異である。とにかく、芝居ならばナラビ大名といふ顔ぶれとして、當時の第一流(今のA級戦犯者)がそろつてゐる。芝居とすれば大芝居にちがひない。過去にもかつて無

く、將來とても二度とは見られないスペクタクルである。

先日、私の家に下村宏氏を招いて、夕飯を共にした。氏ははじめにA級戦犯として挙げられたごとく終戦當時の情報局總裁であつた。最後の御前會議にも列席し、陛下の終戦詔勅をラヂオの音盤にとる時も宮中にあつて、所謂、青年將校に襲撃されたことは、人の知る通りである。私は氏から、終戦當時の秘話さまざまを聞いた。戦局の情勢は全く勝負がないときまゝつた時、閣員の中には、早く戦争をやめたがよいとは信じてゐても、一身を挺して、其を主張する氣概のある者はゐなかつた。さりとて、どこまでも戦へ、最後には勝つといふ自信のある者もゐなかつた。要するに、「物力」もシヨウモウし盡してゐたと共に、「氣力」もシヨウモウし盡してゐた。日本開闢以來の大悲劇は、最後のカタストロフといふやうな、劇的の大場面はなく、ただグニヤリとしてペチャンコになつた形であつた。芝居にもならない有様だつたといふことである。

音盤事件の際は、陛下の玉音を音盤にとつて、自動車で退出する途中で、下村氏は青年將校の手先の下士官につかまつた。自動車の中をさがしたが音盤はない。木戸内府が音盤を預つた、その内府はどこかに巧みにかくれてしまつたから、ついに、音盤の所在はつきとめられなかつた。其時の感想として、下村氏の云ふことに——あの時青年將校の主懸である某が自分の前に出てくるかと思つてゐたが遂に出て來なかつた。本筋とすれば、主懸某が出てきて、自分等は今無條件降伏はもつての外と思ふ、自分等の説を諒として、玉音の音盤を自分に渡してくれ、若し、自分等の説と貴下の所信とが相違するならば、氣の毒ながら貴下の命を頂戴する、といふことにして、はじめに本筋のやり口となる。下士官などが出てきて、自動車の中

をさがしたり、ウソを云ふなど威丈高になつたり、そんなことしか彼等はなし得なかつた、と。——私が思ふに、それでは、その場面をもし舞臺にのぼすとしても、芝居にはなるまい。所謂「芝居」といふものはツクリポトが多いけれども、人生の眞實が最高潮に達したものは、おのづから劇的にキンチョウしたる場面を生ずる。そこまでキンチョウしないことには、悲劇が悲劇になりえない「マヌケ」として感じられるのである。

現に、極東に於て興行中の軍事裁判といふものは委曲をつくして審議をする爲に、被告をして充分に辯解の道を開いてはあるものの其の結論は解りきつてゐるのではないだらうか。東條は先日、戒名をつけたといふことも聞いた。してみれば、被告たちも、自己辯護の爲に時間をとることなく、正すべき誤謬を正すことは勿論だが、眞實の事は率直に認めて、此の舞臺面のスペクテータアをして、却て感激せしめるやうな、いさぎよいセリフをさかしてくれたならばいいと思ふ。

「知りませぬ」「一かうに存ぜぬ」「古いことは失念しました」といふセリフばかりでは芝居にならぬ芝居に終るのではないかと思ふ。

午前の審議は、正午までつゞけられた。靜に影のやうに被告が退席する。その後ろ姿を見ると、思ひなしか何となくカゲのうすいやうに見えた。——のは、照明の燭光がにわかに低くなつたからかもしれぬ。

私達は、場外に出た。秋の雨はやんでゐた。然し、日がさすでもなく、又、新しいタイ風でも來そうな空模様であつた。

俳句的エスブリン

井手逸朗

野火、雲かげは雪が日にふれてをる

これは魚眠洞だが、日にふれてをる——という表わしかただけでも、新機軸という感じがある。これはすいぶん苦心の作だとおもふ。苦心の作でないとしても、この表現を得るまでの苦心の下地を見のがすわけにはゆかない。魚眠洞の例の推敲は、裸木についてものであつて、近來の句には推敲以上の意氣こみさへある。

この「野火」は長いあいだ魚眠洞の眼光の中でちろちろと燃えつづけてきた。だから、單に野火と置いてあつてもそんなに安手のものとはいへない。魚眠洞は、一體が野火というようなものに著目する型の作家とはいへる。枯草をなめてゆくあのパツシヨネイトな野火、野火の性格を魚眠洞は作家的に支持する。あの精悍無類の細い眼が野火の一擧手一投足を見のがすわけがない。私の見方によるとこの句の中の雲影も、日にふれてをる雲もことごとく野火の一擧手一投足である。なんと野火がひろがりゆく果に雲が日にふれてをるのである。火というものが風のある方角に、さうして風の雲が相當に厚くたたまつてある。その厚さの中にひとところ日があつてそれ故に雲は日にふれているのである。野火は聖火であるから、日にふれるという表現の呼應の中にさへも何か神聖なるものがあつて私にはこころよい。この一作をもつて魚眠洞は鳳車、吾亦紅の壘を磨きうとしてゐる。鳳車吾亦紅のクラスの作家の中へ最初に足を入れたも

のはたしかに魚眠洞である。

ぐらがりあめがやんでゐてはる

この眼光は相當のものである。このぐらがり内から見られているぐらがりから、あめがやんでゐるところのものは内から見られていくぐらがり相違ない。この深みを見ている眼光に賛成である。だがこの鑑賞には私の個性が出すぎてゐるかもしれない。魚眠洞はさうじて深みを見る作家ではない。あめがやんでゐる春とは沈潜さがあつてしかも魚眠洞の俳句的技術もあり、それらのものを考へない場合でも、雨のやんでゐる春というものには同感もできる。地が雨を吸うてゐるのだ。私にはこのぐらがりの中に一本の木の幹が見えるような氣がされる。とにかくこれだけの句をなしてゐる魚眠洞に瞠目しないわけにはゆかぬ。

x

明るい月夜は雪の山川ふるさと

この魚眠洞はもう古典になつてゐる。古典の中のこの作家は「雪の山川」というただこれだけの言葉の中にひしと郷愁を壓しゆくしてゐる感じである。雪の山川にふるさとを眺観してゐるのではなく郷愁の中に明るい月夜を見てゐるのである。「明るい月夜」とあるから月が明るいひろびろとした感じになり「雪の山川」と大觀の氣持をすでにさそうてゐてしかも「雪の山川」と月の下にあるものに思ひをいたすところ、雪山があり、川もまた雪の川、山と川とこの二つのものが郷愁の假托となる。ふるさとという言葉は思慕のこころの結實である。廣く見て押へて思ひをぢりりとしかも輕やかにうち出してゐる。この句はそのまゝに古典の中に入つてゐる。魚眠洞が古典になつてゐることはとにかく慶すべきことであらねばならぬ。

つらら朝は女何かと味噌蔵に出入りする

「つらら朝は女」何という心憎いまでにうまいあらはし方であるうか。この「女」は魚眠洞の手がけてきたいつもの「女」であつて人生が布きんをかけてつやつやと光つてゐる——そのような女が何かと味噌蔵に出入りするのだ。ここにある人生圖、魚眠洞は老巧にしかしいつでも魚眠洞的ペーソスをたたへてゐる。情熱の人のもつヒューマニテイ、魚眠洞的な眺めはやつぱりわたくしたちの心をうつ。魚眠洞には近代詩はない。あくまで俳句がある。

×
畑で足のうら雨が来た

この短律は黎々火。今度の黎々火は魚眠洞に比べると見おとりがある。強引に自分の世界で句作してゐることには反對するものではないが、つっこみ方は不足してゐる。眼がとどいてゐない。自分の世界だと安心するきらいがある。その中でこの句だけは軽い味があつて好ましい。海の中の足のうらの句がこの作家にあるが、この句の方に味はひがある。畑で雨が来た——といへばそれだけのところを「足のうら」をつけ加へてみると黎々火的な顔になつてくる。畑に出て足のうらを感じてゐるところへ雨がきたのだ、人生の中の輕妙なる出來事である。自分は石や月や木やとつくんで離れない黎々火よりもこのような多少とも人生の句のする黎々火の方がこのもしい。現在黎々火には苦悶はない。孤獨はたしかにある。

×
なつ夕べのしあはせは赤い小さなガラスパイプ

復員後の千秋子はスランプ氣味だつたが、この作に至つて復員前のあたつてゐた時分の千秋子とはちがつたものが出てきた感じがす

る。千秋子は千澤山の家のあとと息子故せちがらい生活の中にあることはたしかである。しかし皆なではたらい幸福でもありまたそのように手の多い家庭は何といつても當節くらしむきはよいことに相違ない。乏しき中に足らうだけの生活の根基の上にしてはじめてこの句の鑑賞は可能である。赤い小さいガラスパイプとは可憐な位である。この當代の東京郊外詩人に私は遠くから帽子をふる。赤い小さいガラスパイプにやにをつけて彼がタバコをすうてゐるときが幸福でないわけはあるまい。

ちかごろ仲買でもしてゐるらしく主人のトマト色づく

この作者がここまで来たことはおそろしい。プロカーの生活の中へくひ入つたとはいへないにしても、そこかほじつくりと手材している。主人のトマト色づくとはたしかにプロカーの一人生と見る。このちつくりとした眼光はもはやこの人を郊外詩人にしておかないこととおもう。

×
蛙の聲ほどの星の、二人

これは陶抄子。蛙の聲ほどの星とは早春の數少ない蛙の聲とおもはれるが蛙の聲ほどの星という特異な表現はよくこの人の内生活の消息をつたへてゐる。蛙をきいてゐる二人の人間の、蛙をきいてゐるのではない星の、星のかづが蛙のこえほどの、——何としても陶抄子の青春の血の氣のない、けれどもふくぎつなる心理の持主であるこの新作家の一つの斷面を覗いたような氣がする。可成りうまいけれども句作の力という觀點からこの人と千秋子ではやはり距離がある。

明月壇

しやくやくの花黒蟻がうつとりとをる

永田 杏平

月夜のあかるい胡麻の花がこぼれる
葉が零するなら君に傘さしかけてゆく
浪、かぜがくちぶえふいて通る

池沼 星兒

事務所が窓あけて朝は蟬が啼いてゐる
月によめる程の腕時計の月の高い時計
朝にある月に吃水ふかく出てゆく
コクコクわいてゐるひらひら散つてくる
傷が秋を知つてゐる眞白なガアセ
屋根もふき終えて柿の青葉

竹久 清信

ふるさとお盆のむくげ咲いてゐる橋のたもと
河原すすめは河原に鳴いて青田はしり穢
開墾もはだかですすき穢になつてゐる
生きて歸つてはだかにとんぼとまらせてゐる
紫陽花と雞二三羽これから峠となる

宮田 秋桃子

疊つてまた出て月があかるい話のつづき
よあけの月をいのちをこぼるぎ
月があかるい松葉ちるおとか
水に岩があるたくましい男
破れ障子立てて雨ふれば居る
砂と水と月が白うて流れてゐる

水田 草史郎

話すことも聞くこともしづかな星のいろです

中村いちろう

橋のような白い長い雲が雨がた道が春が
みづきの花といふ活けてゐてあらしおさまるらしく
ガラゴロ牛がひいておきさん乗つて春が朝の日さして

梅田 幸延

お米が白うなつてくる水車がまわるさくらの花びら
ちよつとふらした雲から日がさす湖へみち
山、羊つれてあ、ねおとと朝は露
水音山に山のかげして日くれる

横瀬 青山子

ここで道の岐れる道祖神なら車のしげりよう秋
くるまのあと下駄のあと雨のあと同行二人
稲田が夕焼だんだん暮れて白いシャツで
蓮の葉にのせて供へて暑さのぜつてう
飯の煮えてくるおとしみじみ秋である
ゆうぐれみちわかれば花一つしろい

浅野 保榮

みちがわかれるだまつてしろいくもをみる
わかれみちで木檻の匂ふ淡さ二人で
わかれみちのくもにのこつてゐるあかるさ
みんな泳げておよぎついで黒い巖で
さるすべりの花の一ひらづつをちらしてゐる風

加藤 白水境

炎天の汽關車が行つたり来たりする窓が一つあり
夕立をれていつたらしい土間のかたい椅子で商談
北斗星屋根に落ちかかり糞糸切れやすき
暮れるさきの海の紺青をあかりつけたバスで出てゆく
オルガン海に灯がともり秋の海になる
魚紋が雨になつて明けてゐる

山内 俊子

太陽が風をあたたかにする

三井不二雄

小僧さんがいはしわたつて梅さく村に使ひする

きのふのページけふのページとまごれてゆく夏がゆく

夏からはだかでけさはさむいとおもふはだか

白い空に蜘蛛が一びき糸を吐き春です

明るい空が春がきてきちがひが笑つてゐる

星が落ちそうな川がながれ祭囃子きこえる

ぐるぐる太陽がもえてまわるえんとつです

月の光がふさふさとうれたたなのぶどう

青葉に青い雨蛙のゆらゆらと雨の中

日の入り早くなつて月の出がおそい葡萄のたね

葉にふつて雫の音水に落ちて水の音、のふるさと

いも憂いちめん月に月夜の露おく

青いの赤いのとうがらしが二百十日の雨

雨が雫となり月が月夜となる

ガスタンクが焼けてる風景のなかに私をおいて、朝

そのまゝ波に花なげて波のくるのを見てゐる

雨もよひの蓮が匂うよ傘もつて出かける

ちよつとたより渡してゆく花びら風に吹かれて行く

ひがとどくからたちの花女がきてゐる

よるゆかたきればよめもらうとしごろ

子供朝の勉強涼しいうちにおえ蟬がないてゐる

山から朝日が南瓜はやねに映く

川、月が雲を出てからの明るい交番のおまわりさん

技と枝くみあつてゐるせみとる子になつてゐる

つちいろになつて土におちて櫻わくらば櫻通り

つゆくさのつゆをいねのみのるにおい

月のひかりにぬれた屋根のさびしすぎる生活

教會のいろがらすに秋の日ざしが静かなオルガン

しづかなしかしたいくつな空がもつてゐるひるつきで

電休日といふしづけさは朝をはいてゐる音秋

アイスキャンデエが赤い汗になる空虚を皿に

垣が映いて夾竹桃門まで来る映いてゐる

濱で歌つて娘と歌つて濱から道

ねむの木ねむらせでから歸る

だんだんお世話になりやんしたもう日が落ちる

柿の落ちる音の私一人の夜になる

蟬のからぬぐうつくしきしづけさ日くれる

妻がちよつと不在のおせんの白布ひるにする

月などどうでもむしように人の戀しい月夜雜草

雲はやし吾がふれまいとして觸れをり

狂女とは見えす坐りつくつくほうし

月を影に影を歌然君に私

一日夢こく音のそれから大きな夕日になる

月見草よしあわせな風が星をふいてゐる

アンダーソンさんの話を譯して窓の青葉にささきく風

こおろぎ、そこでわかれて一人と一人の影になる

娘さんショパンアルバム窓の紫苑つぼんでゐる

汗の匂ひ今日妻もはたらきしなり

よるの暑く壁のとなりで鍋にふたする音

安達俊郎

森田和夫

三井澄雄

樋口草山

櫻井紫村

松本吉寅

石井洋音

柳澤白草

後藤安喜貞

日野素木

下總磁郎

鶉飼青二

小泉鬼魂郎

手旗が貨車を切つてはつなげる陸橋のある風景
 まつたく青い光へ沈む石のかたち
 カムカムの歌うたひ姉弟湖のうえの銀河
 海へ行く汽車で子供は子供と話してゐる
 ことも外が月夜になる
 煙突のけむりに少し風がある汗してゆく
 海が松林のむかう辨當にしてゐる
 打てば響く仕事黙々鐵打つ
 三十にして戀するみみにあめをきいてゐる秋
 ぐるりを片づけて灯を春にしてなにとなくゐる
 さくろが葉をおとすみの虫のきでゐる
 郵便さんがはがき一枚猫がいつびきないて居る
 詩集のクローバむかし母がはさんた秋がふる雨
 日傘のまるいかげの中で泣いたりなんかしない
 お人形の表情がきいてゐる雨がしづかな
 くりやのこほろぎよまいばん同じ聲して
 住みついでた土が芽ぶく
 ひとり選りふたり選つては村、ソバの花あつまり涼しい
 することのないてのひらのむなしくしてしみあきかぞ
 ひまわりのかほのまんげつ
 秋めいた風吹くと青い灰皿
 ローソクも秋の夜のパイプを持つ少女の顔
 妻も子もなくして星のこを話してゐる人か(長崎にて)
 原子爆弾その時の話など蟬の聲である
 灯がどしやぶりのあめのなかふみきり

犬飼 啓三
 鶴岡 邦彦
 石原 ゆき男
 三好 茶丘
 佐竹 久枝
 田中 一路
 中村 秋夫
 平賀 夕里
 梁瀬 阿羅與
 内藤 英夫

あれこれ幼いころの地藏盆のお地藏さんで灯もじこる
 夕やけ、女の髪の毛のやうに川の藻がうごく
 月が出ると明るくて萩が咲いてゐるような
 夕べひざに手をおくとときのかなかな
 ききようととききよの空の色と七夕になる
 手からさやから小豆がとぶ日和さだまる
 さるすべりの花、はとは破風の影にゐて鳴く
 土用丑のどちようとするにはとれて田のひでり
 二階から見える月夜で月見草さく
 葉がぬれてゐて葉立つてゐる
 日の暮れまへの咲いてゐる黄菊
 月夜のろがこいでゆくのて歩いてゆく
 總跡 夏草街の復興が遠い水平線
 月が窓をかげらしてしまひ時計のネジを巻いてゐる
 稲穂も揃つて朝々遠くに山並の清澄
 朝はめつきり涼しくなつたこともやぶからしの花
 二階からはきびの垂り穂と水平線がお中日
 こうろぎのヒゲが長い夜の話もふるさと
 秋暮れようとする鐵橋の向うから笛吹いてくる汽車
 炎天の煙突純白の雲をもつ
 月の明るくこの蚊帳もひさしぶりの親子三人
 手にしてパイプのつや秋空ふと思いがきえてしまふ
 バス通してからの道が一本又炎天を荷車ひいてゆく
 土手の一軒また一軒ボプラ青い木
 蝶々石にとまり水かれてゐる川原

植野 香林洞
 瀬川 英吾
 矢嶋 川せみ
 小栗 水花
 千葉 吐男
 水野 田々詩
 木村 樟樹
 走内 庭草
 片桐 光成
 夷石 龍樹
 湯淺 影外子
 小澤 法雄

黒焼の看板と暗い土間の娘さんなど旅を秋
 海も空もみんな美しい女と爪紅の花
 うたつて月があかるといふのをたまつて
 ながれ星を見たといふのをたまつて
 渡船に山がすこし紅葉してゐる朝のくもり
 ちちははの墓を照らしてあかるい月である
 南瓜の花、朝飯をすますと一日が始まる
 秋の日床屋にさし込んでゐる大きな鏡人の通る
 すすき 仁王さまがいかつてゐる
 山 び、こ 山にあそんでゐる
 雪がひよこをすこしぬらして通つてしまふ
 こどもは道わせて足袋つくろうてつくつくぼうし
 月が雪にかげして枝の中ゆく
 黄色い月が半分顔を出した祭の太鼓
 すだれ一枚さげて守衛さん夜は風
 すいとんでもたべて夜は寝ころんで讀んでゐる
 南瓜の安くなつた話の井戸に足しまふ
 空の車で山路でこぼこつづく法師
 はれると水に輪をかく虫が水が夕焼
 すすめかえつてしまつた子供のこえが月になる
 紫陽花ひとり はだまつてゐて
 なすび大きくならせて貧乏してゐる
 まづしく病んでせんじ薬ふつふつたぎらせてゐる
 昔は昔と思つても昔のままな指のうづまき
 木ヘナイフつきさして白い皮をはいてゐるのです

平賀 夕星
 尾 佐六
 福岡やゑ子
 吉原三峽水
 佐藤 正作
 吉村しをり
 加藤六々子
 青木 丘草
 尾畑豊舟人
 下田 夢
 畝木 茂彦
 西本 イチ
 白澤 道子

東京が戀しいといふ女中さんと秋の日しづかな
 水 うつた 風 に い つ ぶ く
 朝から待つてひぐらしなくても待つてゐる
 山門 落葉する石段だんだん掃く
 ちようど屋根がえすんでからさむい雨ふる一日
 星がばらばら木の葉おとしてゐる
 ふる雨なにもかも忘れることとする
 しげりてしげみの中に入つてゆくあかるい晩
 雲が流れるやなぎの下の貸ボートです
 お盆がくるとくるといふ虫きてないてゐる夕餉
 ことしの南瓜床几にいつばい日をあててゐる
 湯屋を出て石ころけつてあるき月はまんまる
 月が出るしづかな足音きこえくる
 ひとつの星を葉が散つて散つて明けゆく
 月があがるくて森になるむかしの道
 夕やみ魚一つはねてお山が炭を焼きたした
 沖へ沖へ船の旗が雲にとどいて消えてしまふ
 海からてる 月を 海邊のお墓
 毎日うぐひすなく山のけふも石切る音の暮れる
 空へ太鼓うちならす月がうかがひでてる
 雨の あとの 星 が星へ自轉車で
 一本は折れて鶏頭の四五本日がかたむく
 スピイカアが簪くばかりな青空運動會がお晝です
 暮れた空の柿の葉をふと三日月さま
 子猫も繪本も 乳母車の中夕日

高山 翠月
 山田 三郎
 大石 香代
 近藤としを
 岸田谷川水
 中村未知男
 梅路紗智子
 佐藤 コト
 小川 環
 青山さだ子
 田中 無絃
 田中 冴子

咲いて白い黄色い花の朝から夏の日
 一人きてひかりにてパチンコ屋のパチンコのはねる音にて
 てふてふひらひらする日ざしが秋が扉の外
 雲から月が青田から風が吹いてくるカーテン
 へちまぶらさげてまだほんとうでない體風のふうりん
 やわらかい土をはだして種まいてゆく秋を
 水がゆれてゐる萩がその風が顔洗ふべく
 はるばるきませし母上と曇さ云ひそれから答へてはかり
 新しい下駄をならしてお盆である夜
 鳴子がなる景色になつて鎌といでゐる
 春あくびなんぼでも出てくるぞうりを作る
 雨戸いちまいあけてあつて鳴く小鳥朝
 とんぼしつかりつかまつてとうきびが穂になる
 窓にならせて南瓜に瓜のあとなど病みてゐる
 捨て子の泣き聲秋の夜ラヂオがきかせてゐる聲か
 獨りきて木の蔭しろく山羊のひげがさびしい
 稲のはしり穂へよい雨がきてくれどき
 めつきりすすしくなつた夕月と大根二葉
 みんな雨がほしくて蟹が砂まみれになつて道の草
 ここで道がわかれる萩がこぼれそうで右へ曲る
 月光 やね やぬ れて涙のような
 夕焼ける窓の風がもう秋である椅子
 ひが ん花 分 敷 場へ道女の先生
 どんぐり拾ひて墓石に置く童であつた
 ぐみの實うれてしづくする雨を旅に

前田 昭
 池邊象外子
 中西 國友
 三井 靜峯
 野條 蒼風
 渡部紀代詩
 山中 勉
 小川 清人
 栗田千可志
 小谷秋星子
 永井朗甫人
 餌原 畊人
 鶴見火差之

憩うて乳房ふくませて夢の穂波
 山が見えてゐて山から降る雨の明るさ秋
 山からきて山のはなしつめたい飲物
 ぬけがらで蟬の形をしてゐて豆の葉にある風
 稲田も刈田も日和がようて二人で刈る
 みどりごよ抱けば草の香のする
 齒醫者さんの白い服と窓のひまわりの時間
 そうすることにしていちじくは皮むいてたべ
 しげみの中の青い灯の産科病院の押せばなるべし
 しその實こげば匂ふ秋になつてゐる
 下駄になる木を下駄にひく冬の日
 とんぼとまつてゐるたらいへだいてゆく
 唐黍の穂も包をさげた影も遠山夕日
 青い柿でもひろつてかへるうおばあさん
 電線の子つばめの五羽配給所に粉をもらひに
 太陽あまねし乳しぼつてゐる乳の匂ひ朝
 裸ではだかの子をおんぶして蟬時雨する
 川を見ながら逢ひにきて君ゐる日盛
 おたつしやでおばあさん豆が豆になる
 鶏頭眞に赤く咲いてゐる夕日の中
 こんなところで墓石さびしく町が見えてゐる
 じうじう物煮るにはひ病舎一ぱいの梅雨なのです
 草のつゆ靴に感じその心働きに行く
 子供木のかげせみが木の上鳴きやまない
 海の青さよすすしくしたじく

杉原明雄
 立尾 修
 小林 秀洋
 栃本 敏男
 檜山 青夢
 増山田比良
 櫻井 白朗
 丸田 治子
 揚井 二作
 芦塚 榮
 加藤 陸男
 尾畑 和美
 尾畑 雅美
 杉山 菊三
 佐藤 綠雨
 飯野無果花
 竹澤 茂
 平松 颯々子
 安藤 錦泉子
 高屋 えいじ
 前田 一塔
 伊達 宗勝
 雁木 竹三

蛙やこほろぎや月が半分
 汽車が發つた秋空一枚プラットホーム掃いてゐる
 わくらはばふかかれてひもじい
 東北全般雨だと云うわら家しづくしてゐる
 もすなげばその頃よく泣いてゐた女のせせい柳の木
 梢にかつこうとんでかつこう夕雲
 光線まともに薬品棚毒薬の黒い蠶秋を
 とにかく割當きめませう楷火もえてゐる
 辻でせとものせりうりするガス燈ちらちらする
 川のりとりては手にす流れはいれて指のしろし
 呼んでも返事がないので秋の日雞二三羽
 先ゆく人の繪ひがさくくるくるひざかり
 月のまるさもすつかり河原に出る
 あきるまで白い雲見て又本ひらいて病んでゐる
 秋がまるいくだもの皿に盛り賣つてゐる買つてゆく
 野良着の汗のもうかわいてゐる黍の鹽
 津波がなにもかも持つてゆきさばはした空の浮雲
 朝日が納屋にもう糸車の音させてゐる
 トランクの疲れようはまた詰めてきた下宿のたみ秋の日
 ドカチンドカモンはやして手拍子かきまに月がまろく(沖繩にて
 驛へ道が秋晴れた一人二人見えてゆく
 臥してをれば人の戀しく雨のはげしく
 水に輪がひろがつてかさなつてふりつづく雨
 かやつり草も月夜の、一寸散歩に出て
 すべてがマダノリアの匂ひである白き一輪

野口 光
 石川 青花子
 東 九八
 下山 尙
 横井 步
 下山 斗詩
 寺田 夷平
 佐藤 証市
 柴田 美津緒
 廣石 たみ子
 小部 一樹
 永田 孝子
 中野 弘雄
 八巻 亘
 村越 庄吉
 中野 黎明
 濱田 心不競
 花輪 紫川
 西山 賢珠
 海堀 鬼胎
 田中 千治
 井上 英子
 阿部 シゲ
 澤木 昭二
 柴田 小百合

軒からよい雨となつて降るはちの葉
 へちま日に日に伸びるまだ上着なしでつとめに
 月の雨が傘に音たてるほどさして行く
 雨がしづくしてゐる柿の若葉朝
 とうげのもみちをおりてゆく町が雨の中
 流星が、そのとき天の星達と黒い木の枝
 歩けば汗ばむほどの吊案山子ふらふらしてゐる
 梢のあんな高いところで青い葉がゆれてゐる
 南瓜のつるがだんだん枯れて風が秋になる
 四日月らしい稲架の影の火が燃えてゐる
 秋は早くから山に雪のきて村の調製所
 旗をふる汽關車が通り朝である冬である
 藪の雪の明るさ朝をつとめにゆく
 山の松に日あたり家々煙高くあぐ
 くちなしの花白く二三人たたすんでゐる
 わが身ぬらせてゆくあめのみちおちは
 今年障子は切張りにして年末の夕焼の海です

河重 十九子
 小澤 羨心王
 谷口 晃男
 大箸 乙美
 梅木 成敏
 太田 松子
 中本 義夫
 中村 敏喜
 八谷 不二男
 仁平 青蛾城
 酒井 健之
 鈴木 單衣女
 鈴木 梅宇人
 鈴木 昇
 藤本 ふき子
 北田 大林木
 福本 逸子

一 龍 春 一 主 宰

俳句雑誌

暖 流

○ 雑 詠 五 句、春 一 選
 ○ 締 切 毎 月、前 十 日
 ○ 入 會 爲 替 納
 六 月 六 十 五 圓

東京都新宿區下落合四ノ二五四 暖流發行所

・チャシの會(函館)

九月四日 館文庫にて。

薄荷釜で南瓜焼いてもらふ子等嬉しい
 風にあざみのむらさき岬たそがれる
 船に船が遠いあかりが鳥賊釣舟で
 露路裏に住み今夜月夜の七草を縁に
 たねまいていつぶくひるづき

塔斜子
 幸作
 照雄
 康藏
 つねを

・鷹の會(弘前)

九月七日 角弘樓上にて。重夫句なし。

すんと登つた月で枝ぶり
 こたえて底の深さにある山百合
 出た出た月がと歌うて月に指さし子供
 ほうれん草の双葉を間引きこの頃の涼しさ
 硝子越しに妻が男湯に私がゐる窓が秋
 日盛りとんぼとれないで呼んでるこえ
 病んで子の、窓にはとんぼがふえたという妻と

夜雨
 紅夕
 古鐘
 青朧
 石雨
 竹寒
 秋耳

九月二十九日 月見の句會、東里居にて。古鐘、東里、空、洋子
 即骨、靜窓、石雨、京次、子杏、青朧、竹寒秋耳參會互選、詠する
 程に酒盃にぞやかに主人心盡しの宵豆大皿にあり豊かであつた。

・銀葉會(秋田・神宮寺)

九日例會日が丁度大曲のお祭に當つたので月々虹氏のお招きで同
 氏居に開いた。句座に花火の音を聞きつつ赤飯などをいたゞき庭の
 木の葉を時折明るくするのは花火であつた。祭の終えた町の灯を後
 に夏けて散つたが近頃の楽しさであつた。出席者月月、ひさし、去
 夢、せい人、金治、夏介、夏行、月々虹、ふじ、露路。

・仙北の會(秋田縣)

仙北郡層雲人を一とまとめにして新しく會合を作り大曲と角館と

隔月に一回づつ開くことにした。單なる句會としてでなく行きたい
 と思つてゐる。第一回句會は月々虹居にて、九月。

二百十日の風くらの戸にくるいかぎ穴
 きいろい日がくさはらに一本の木のもつ影
 尾花戸をしめてある
 月がとほり虫なきいろいろになく
 墓標青いかぎりの海へむいてゐる
 おらんだ菊に蝶がくるに白い季節風
 油繪のような雲と風船のような朝の白い月と秋

吾亦紅
 せい二
 蚤明
 燈光
 夷平
 露地
 月々虹

・山形句會(山形市)

十月十日 綠雨氏宅にて、雨つづきのけふも雨の日しづかに語
 る。

木犀のかほる雨にて傘をつぼめる
 崖に葛の葉とる通る馬の我に寄りくる
 こんな靜かな石きる音で道が秋の朝日いつばい

二石
 綠雨
 葦彦

・トマトの會(大牟田)

第一回の句會を、氣の知れた者ばかり六人、三塚山に登り草の上
 に苦味生氏夫人心づくしのお重と酒とをひろげ綠平翁を圍んでなご
 やかでした。トマトの句會はこれからいかにやるつもりです。

草の穂草の花道が登つてゆく空
 日暮時の日が野菜畑涼しくなると虫ないてゐる
 山から見えて海のいろ空のいろも秋
 心賃しくあなたと私と濃茶の冷えた茶わんが二つ
 やけあとも月夜になるとうきびのほ

綠平
 苦味生
 林二郎
 敬三
 幸一郎

・みどり會(山口縣)

郷土文化協會が私等の村に出来まして十月十六日その作品展を開
 催、繪畫詩歌彫刻生花其他で、私等は句會の歌草を出品したとこ

る、新しく共鳴者があり参加がある様子です。

林の松の枝にも歌ふ子にもしたたか月光
庭草
青 天 椿 の 實 は じ く 香 英
頭 だ る く て 秋 の 日 照 草 ま ぶ し 石 英
子 等 の 聲 遠 ざ か り わ づ か の 水 が 濁 つ て る 正 楓
肩 から 下 し た 石 礪 賣 お 曇 い こ と で す 玉 鳳
菜 の 手 入 れ よ く 人 の 來 る 日 で は あ る 美 作
電 柱 一 本 の 宵 月 と な る 道 に 出 る 碧 松

・山並の會(長野)

九月二十一日夜をりから静かな雨を集ひ白草居にて句會をした。
北朝、茂雄、白草、灯草、敏子、北光、丘草、治子、亞泉の九人。

直 角 の 建 物 敵 首 反 對 の ビ ラ が 雨 茂 雄
機 關 庫 こ と に 働 く も の ら の す す け た 太 陽 白 草
は れ て 山 の 畑 は 大 根 間 引 し て る そ ば か ら 秋 北 光
同 人 達 の 親 睦 を は か る 意 味 だ け で な く、 層 雲 人 以 外 の 人 達 に ひ ろ
く 呼 び か け 層 雲 を 弘 布 す る べ く 冊 子 「 山 並 」 を 刊 行、 既 に 二 號 を 出
し た。 印 刷 用 紙 も 確 保 し て 二 ケ 年 は 發 行 し 得 る 見 透 し が つ い て る
る。 俳 句 は 北 朝 選、 其 他 評 論 隨 想 等、 何 人 に も 紙 面 を 提 供 す る。 詳
細 は 長 野 市 外 西 風 間 七 九 五 風 間 北 光 に 照 會 あ り た い。

・菊の會(京都)

十月五日、菊溪亭にて。秋が實に好い日、井師が句にされた小母
さんも猫もしづかであるのを、集うてしづかな足りた時を過した。
風が匂うてくる木屋はお墓へ詣る足音 木衣樓
山羊二匹と三匹とみて山羊の親子に桐の葉が落ちる すぐる
秋が遠くまで見通せて焼跡の木である 應 香
橋の向うに朝がきて學生さん體操してゐる 草史郎
軒につるし柿などみんな田に出てはたらく 朝陽子
萩の二株ばかり散つてゐる道から家 俊 二

投稿規定

俳句 萩原井泉水選
編集部選

- ・ 投稿は誰でも自由
- ・ 一人一月一稿
- ・ 句数は一般は五句 誌友は十句 社友は三十句迄
- ・ 用紙は半紙二ツ切大のもの
- ・ 一枚に五句迄楷書清記
- ・ 二枚以上は左上カドを綴る
- ・ 句稿の添削を望む方には内規あり、照會ありたく

文章 編集部選

- ・ 評論 研究 隨想等

俳句會報

- ・ なるべく會の直後に詠草に會の報告文を添える
- ・ 俳句會報は層雲社に保存しておきます

投稿に私信や用件を同封されても差支えない

締切 毎月十五日
投稿先 層雲社編集部

京都市東山区本町十五丁目

層雲 第四一〇號

昭和廿二年十月廿五日印刷納本
昭和廿二年十一月一日發行

定價 一部 十五圓

(送五〇錢)

前金で半年分以上お拂込下さい

河月號よりと御指定下さい

御轉居の際は發送部迄御報の事

神奈川縣大船町山之内(龍洞)
主宰 萩原井泉水

編集兼 發行人 伊東俊二

印刷人 竹内貴美

京都市柳馬場四條上ル
印刷所 竹内萬聚堂

京都市東山区本町十五丁目

東福寺山内永明院

發行所 層雲社
振替京都八一七八番

配給元 日本出版配給株式會社

雲 橋本健三

草にねてゐると

雲もまた一つの静物である

海

岩かげを

潮がながれてゆく

ながれてゆく

よくみると

沙もまた流れてゐる……

濱

砂はまに

小さなちいさなシヤベルがある

砂はまに

小さなかはいゝ下駄がある

紅い鼻緒に

あと掛けのひもが解けてゐる

砂の上に

すながこぼれた儘である

かぜニ
橋本七度煎
 日本人のカラダにびつたり合つた!

自由律俳句 層 雲 第三十五卷 第五號 昭和廿二年十一月一日(毎月)一回(一日)發行 昭和廿二年十月廿五日印刷納本 定價 拾五圓